

# 東西文化の架け橋であり続けるために

大東文化学園 理事長

## 國岡 昭夫



くにおか・あきお氏

昭和6年生まれ。東京理科大学卒業。半導体工学専攻。工学博士。米国サザン・メソジスト大学特別研究員、ロンドン大学客員研究員、青山学院大学教授、同学長、日本私立大学連盟常務理事、大学基準協会理事、日本私立学校振興・共済事業団理事長など歴任し、現在、大東文化学園理事長、横須賀学院理事長、青山学院大学名誉教授。

本学は、私立大学としては異色の生い立ちをもつ大学といえるかもしれません。というのも、特定の創立者が存在するわけではなく、いわば国家的使命を背負って誕生したからです。

明治維新を契機に、欧米の文明・文化が堰を切ったようにわが国に流入してまいりました。それにより優れた伝統に裏打ちされた日本固有の文化が見失われつつあると危惧の念を抱いた人々がいました。

「漢学の振興により日本人古来の道義、美風を取り戻したい」。そうした精神に基づく、いわゆる漢学振興の機運が大正時代に高まったのです。有識者たちの活動により、衆議院における決議を経て、1923(大正12)年、本学の前身である「大東文化協会」が設立され、同協会のもとに大東文化学院(本科、高等科、旧制専門学校)が開校されました。

ひたすら西洋化にむかう日本を憂い、自国の文化やアジアの文化を知り、ゆるぎないアイデンティティに基づいて西洋文化の良さを吸収していこう。そうした、現代の国際社会の規範ともなり得る理念をもって本学はスタートし、現在もそれは「建学の精神」として、本学の教育に脈々と息づいています。

「漢学の振興」という点では、設立当初から書道の講義があり、日本で初めて書道学科(文学部書道学科)を設置いたしました。大学院の書道学専攻(文学研究科書道学専攻)は日本唯一のものでございます。こうした学科は毎年多数の国語、書道の教員などを輩出し、日本全国で活躍しております。

また、「東西文化の融合」という点では、国際交流にいち早く取り組んでおります。20カ国58大学と提携し、さまざまな留学制度を設けています。年間に本学からの派遣留学生は350名超、海外からの留学生は600名超を数えるまでになりました。この4月からは北京に事務所を構え、より本格的に中国と交流を図ろうとしています。

## 適正な組織づくりをめざす

本学では少子化により厳しい競争環境にさらされている中で、卒業生ネットワークの活用に取り組んでいます。本学の卒業生には教員が多く、幸いなことに全国いたるところの学校に在籍しています。そうした方々の教え子に、本学の魅力を積極的に伝えてもらおうとしています。

そのような努力をしつつ、学内においても、学生サービスの充実に努めたいと思っております。それは情報教育や語学教育といった教育内容にとどまらず、キャリア支援やIT環境の充実など、あらゆる範囲に及びます。やはり本学に入学した学生には、ここで4年間をすごして本当によかったと、真に満足して卒業してもらいたい。私はそう願っていますし、それが私の使命であるとも考えています。その実現のためには、学生に対してできるだけ多くの資源を使いたい。それを削減するわけにはいきません。

しかし、資源は限られています。限られている中で今以上のサービスを提供するには、学内の改革が必須です。具体的には、組織の適正化ということになるでしょう。教員・職員ともども適正な体制を再考することです。大学が置かれている環境と、私の立場からすれば、それを最重要課題とせざるを得ません。今後それなりの覚悟で、そうした改革に取り組んでいくことになるでしょう。

## 学部改組は慎重に

学校改革という点では、学部学科改組もひとつの焦点です。世間の期待を冷静に受け止めながら慎重に考え、検討していくつもりです。

大学と同時に、大学院の拡充にも努めたいと思っています。現在、ロースクールも含め7研究科あります。バラエティは整いつつありますが、教育体制が整っているとは言い難い面があります。それは、今はまだ学部の教員が大学院のほうもフォローしているケースが多いためです。そういう状態では、大学院としての存在価値はまだ十分とはいえないでしょう。理想をいえば、大学院の中でプロパーの教員が育ち、彼らが学部

をサポートしていくような、今とは逆のような体制になることが望ましいと思いますね。

## 「地域連携」が世界共通キーワード

実は私は完全に理系の人間でありまして、私のよく知る理工系の世界には、国境はありません。そのような世界共通の観点で大学経営も考えるべきだと私は思っています。

そうした見方でアメリカやヨーロッパの大学について調べていくと、彼らが学校存続のためのキーワードとしていることのひとつに、「地域連携」というコンセプトがあります。本学も「地域連携」を重要なポイントと考えていますが、そうした欧米の進んだ大学をひとつの目標としています。

本学はすでに地域連携という趣旨で、非常に多くのことに取り組んでいます。たとえば、東京都板橋区と本学とが21世紀の地域社会の課題に挑戦していくためのものとして、2000年5月に「地域デザインフォーラム(地域連携研究)」を立ち上げました。本学板橋キャンパスのある板橋区は、「幅広い区民とのパートナーシップ」を基本理念として再生板橋の創造をめざしています。また本学は、教育研究機能の提供を通じて地域社会への貢献をめざしています。この両者が共同し、双方から研究員25名程度が集まり、区政運営において緊急性の高いテーマ(福祉、新産業創出、少子化対策、危機管理対策など)を研究しております。

ほかにも、近隣の高島平団地の再活性化をめざした「高島平再生プロジェクト」や、なかいたばし商店街振興のために出店した「なかいた環創堂」など、本学と地域とが手を取り合った数多くのプロジェクトが進行しています。あるいは施設の面でも地域環境との共生をめざし、板橋キャンパスは緑や太陽光、風力、地熱などの自然エネルギーをふんだんに利用した「エコキャンパス」を実現しております。

こうして身近な地域とより良い関係を築きつつ、一方で世界に目を向け、建学以来の精神である、東西文化の架け橋となる人材を育成し続ける。これが本学のめざすべき方向であろうと私は考えています。